2002

フランス哲学思想研究

第7号

春季シンポジウム報告
哲学と精神分析

はじめに ……谷川多佳子
狂気内包性思想の精神分析 ……加藤敬
有事と越境―ハイデガーのDing／ラカンのDing― …大宮勘一郎
後期メルロ＝ポンティと精神分析 ……廣瀬浩司

秋季シンポジウム報告
メーヌ・ド・ビラン哲学の可能性

はじめに ……松永澄夫
抵抗の異質性―メーヌ・ド・ビランの「抵抗」概念の可能性― …村瀬鋼
反省とシーニュ―フランス・スピリチュアリスムの一系譜― …岩田文昭
身体の構成―ビラン？ビランを超えて？― ……中敬夫

公募論文

記号としての身体運動―メーヌ・ド・ビランの記号論― ……越門勝彦
コントとミルの決定論を巡る対立 ……長谷川悦宏
精神と身体の境界―『物質と記憶』における運動図式の解説を巡って― …中根弘之

書評

塩川徹也著『パスカル「パンセ」を読む』 ……村上勝三
岩田文昭著『フランス・スピリチュアリスムの宗教哲学』 …中敬夫
村井久二著『コントとマルクス―「コント＝マルクス型発展モデル」の意義と限界―』 ……安孫子信
石井敏夫著『ベルクソンの記憶力論―「物質と記憶」における精神と物質の存在証明―』 ……杉山直樹
石崎嘉巳・澤田直編『サルトルの遺産―文学・政治・哲学―』 …中田光雄
内田樹著『レヴィナスと愛の現象学』 ……熊野純彦
歴田茂吉著『現象学と見えないもの―ミシェル・アンリの「生の哲学」のために―』 ……望月太郎
宇野邦一著『ドゥルーズ　流動の哲学』 ……財津理

日仏哲学会2001年活動報告
『フランス哲学・思想研究』第六号訂正
日仏哲学会入会手続きについて
大会一般研究発表応募要領
『フランス哲学・思想研究』論文応募規定
編集後記

日仏哲学会

廣瀬 浩司
電子署名者 :廣瀬 浩司
DN : cn=廣瀬 浩司, o, ou=筑波大学,
email=parergon@jcom.home.ne.jp, c=JP - 日本
日付 : 2012.01.18 07:21:15 +09'00'

後期メルロ＝ポンティと精神分析

廣瀬　浩司

メルロ＝ポンティにとって精神分析と現象学は、無意識の思想と意識の哲学として対立するものではない。あるところで彼は、現象学と精神分析は意識の「潜在性 (latence)」という共通の課題に向かっており、矛盾したり平行したりするものではないという (PD, 283)。本稿では、この「潜在性」がどのようなものなのか、メルロ＝ポンティの「後期」(五十年代半ば以降) のテクストに沿って探っていきたい。とくに「分節化」「回転軸」といった用語に注目することによって、彼が「存在論的精神分析」(VI, 323) と呼ぶものの構造論的側面を強調することになるだろう[1]。

1960 年の「言語と無意識」に関する学会のコメントにおいてメルロ＝ポンティは、以下の二つの主題において、フッサール現象学は無意識の潜在性の問題に触れているという。第一は身体にかかわる。それは「見える＝見るものとしての身体」あるいは「一種の反省」を遂行する身体と呼ばれる。第二は知覚世界との関係にかかわり、「同時性」および「遠隔（距離を持った）作用（action à distance)」という主題が挙げられている (PD, 274-275)。

この学会での彼の発言の主旨ははっきりしないが、本稿では他のテクストを手がかりに、まず第二の問題を第 1 節で論じ、ついで第一の問題を第 2 節で論じる。そして最後に、彼の存在論とフロイト的主題との関係を吟味することにする。

1．感覚の不可分性とその分節化

はじめにメルロ＝ポンティの「後期」のテキストから無意識の定義を含むいくつかの文章を抜き出し、そこに収斂している問題を整理しておこう。

まず、コレージュ・ド・フランスにおける最晩年の1959-60年の講義は「自然とロゴス」と名付けられているが、その講義要録で、無意識は次のように定義される。

> 無意識とは感覚すること（le sentir）そのものである。というのは、感覚することは感覚される「もの」の知的な所有ではなく、そのために私たち自身を所有放棄すること（dépossession de nous-mêmes）、それを認知するためには思考する必要はないようなものへの開けであるからだ。（中略）根源的な無意識は＜存在するにまかせること（le laisser-être）＞、初源のウィ、感覚することの不可分性である。このことは、自然的シンボリズムとしての人間の身体という考えに導く。(RC, 179)

無意識はここで「感覚することそのもの」、あるいは「感覚することの不可分性」のことであり、何かあるものへの肯定的で思考以前の「開け」である、と定義されている。これを見る限り、当時のメルロ＝ポンティにとって無意識は、言語や象徴界とは無縁なカオスとして考えられているように見える（「自然的シンボリズム」と呼ばれているものの内実については、本稿の最後で検討する。）

ところが、同時期に書かれた『見えるものと見えないもの』の草稿の「問いかけと直観」という章では、ラカンの有名な「無意識は言語のように構造化されている」という言葉が肯定的に援用される。

ある人[＝ラカン]が言ったように、視覚それ自体、思考それ自体も「言語のように構造化され」ており、文字以前の分節化（*articulation avant la lettre*）である。すなわち、なにもなかったり、別のものがあったりしたところに何かが現れるということである。(VI, 168)。

一読したところ、はじめの引用とは対照的に、メルロ＝ポンティはラカン的な無意識概念を受け入れ、感覚や思考の言語的構造化を一次的なものと考えているようにも見える。しかし、上の引用で「分節化」は「何か (quelque chose)」が現れるための条件、あるいは何かが現れる場そのものとしても提示されている。それは対象一般の現出の可能性と関係しているのである。このことについて彼は別の箇所で次のように言う。

こうした無意識は、私たちの奥底や「意識」の背後にではなく、私たちの前に (devant nous)、私たちの領野の分節化 (articulation) として探求されるべきだ。それが「無意識」なのは対象ではないからである。それは、それによって諸対象が可能になるようなものであり、布置（constellation)であって、そこに私たちの未来が読みとられる(VI, 234)。

メルロ＝ポンティはここで、知覚世界において、諸対象の経験を可能にする領野の分節化として無意識を定義する。それは意識の奥底や背後にある第二の思考、第二の表象として実体化されるようなものではない。かといって、それは意識のたんなる「自己欺瞞」（サルトル）すなわち「抑圧を引き受けないという決心」あるいは「想像的意識のためらい」にとどまる主観性の一様態でもない（RC, 69)。無意識とは、私たちの前に開ける領野そのものを直（じか）に分節化するものであり、知覚対象の

現出の構成要素を形作っているものなのである。言い換えるならば、無意識とは、主体が実際に遭遇する障害ではなく——それは主体を「自然的目的性」に組み込んでしまうことだと彼は言う（RC, 66)——、また自己欺瞞的な主体がなんらかのかたちで定立するものでもない。それは意識の「対象」でないにもかかわらず、意識に抵抗する「否定的なもの」である。

このような意識に内的に抵抗する否定性を、メルロ＝ポンティは「分節化」と呼ぶ。それがそう呼ばれるのは、まずある特異な「差異」として現れ、その回りに「布置」を形作るからである。「自己現前とは、差異化された世界への現前である」(VI, 245)。そしてまさにこの特異な分節化を通して、知覚主体は外部へと開かれる。この意味における分節化を彼は「回転軸」と呼ぶ。

> (初源の)知覚とはおのずからゲシュタルト化の領野の開けである。——これは知覚が無意識であるということだ。無意識とは何か。回転軸（pivot）として、実存範疇として機能するものである。そしてその意味で、知覚され、知覚されないものだ（VI, 243)。

無意識の受動性は意識を主観的世界に閉じこめるものではない。反対に意識は、まさに分節化という回転軸を媒介に潜在的世界に対して開かれ、そこにおいて「何か」がゲシュタルトとして現れるのである[2)]。そしてこの回転軸そのものは「知覚され、知覚されない」。すなわちそれは現前と不在の彼方にあって、知覚的領野をひそかに織りなしている。このように無意識とは、現前と差異で織りなされた潜在的構造への開けなのである。

そこにおいて私たちはおのれの未来を「読みとる」ことができる、とメルロ＝ポンティは言う。しかしこの未来は、現在の「主体」が投企す

る未来ではなく、私たちの「前」に広がる有限な「布置」に直に「書き込まれている(s'inscrire)」[3]。たとえば「そこ」に何かあるものがゲシュタルト化するとき、この「そこ」と「ここ」は「同時」である。すなわち、私の身体が位置している「ここ」という零点の創設とともに、「ここ」と「そこ」が同時であるような潜在的な布置が開かれるのだ。フィンクとは異なり、メルロ＝ポンティは、「そこ」は「ここ」が変様したもの（弱まったもの、派生したもの、投影されたもの）ではなく、両者は相互に分節しあって示差的なシステムを形作っているという（S, 222 n.)。このような潜在的な布置への開けのおかげで、私たちは「今ここ」(S, 212)において「そこ」に到来するであろう何かをすでに巻き込み、いわば自己を分割しているのである。

これがメルロ＝ポンティが「距離を持った作用」、「同時性」（前出）などと呼ぶものであろう。不可分な感覚的存在にたいして私たちは直接に接触することはできない。しかし無意識は、そのひそかな分節化において、「そこ」に現れるであろう「何か」とのひそかな結合（かつて彼が「潜在的な志向性」と呼んだもの）を持っている。それは潜在的世界との間接的であるからこそ根源的な結合なのである。

> 感覚的なものの次元は（中略）距離を持った存在、すなわち汲み尽くしがたい豊かさが、今ここにおいて燦めくように証されることである。（中略）事物は開示され、隠されるというかたちで私たちの前で垣間見られる(S, 212)。

概念以前で対象以前の「何か」は、開示されると同時に隠されており、後に見る二重性をはらんでいる。それは特異な分節化としてしか現れない。しかしそれは主体の概念化に抵抗すると同時に、潜在的な存在の無限定な豊かさを「今ここ」において「燦めくように」証している。「感

覚すること」としての無意識とは、こうした潜在性への開けであり、不可分な感覚的存在の「距離を持った」把握なのである。

このような問題系が、私たちの経験全体の分析をどのように変化させるのか、それをメルロ＝ポンティは体系的に展開することはできなかったが、その一端をうかがい知ることはできる。周知のように、メルロ＝ポンティにおいて、この分節化のはたらき、それによる知覚世界の構造化という問題は、身体における自己と自己との関係に根拠を持つ。

2．身体の反転可能性と回転軸としての無意識

メルロ＝ポンティが『見えるものと見えないもの』で「反転可能性(réversibilité)」(VI, 204) を「究極の真理」だと述べていることはよく知られている(VI, 204)。ただし反転可能性といってもシンメトリー[4] のことではない。彼の哲学について、自他の対称性ばかり問題にしているという批判がなされることがあるが、反転可能性は非対称性と矛盾しないばかりか、経験的な非対称性が現れる超越論的な根拠でもある。そしてそれが――これが本節で示したい論点であるが――無意識的な分節化と深く関係しているのである。

このことをメルロ＝ポンティが範例的なものと考えている、触れる右手と触れられる左手の例で見てみよう。

> 触れることと触れられること（中略）それらは身体においては一致しない。触れるものは正確にはけっして触れられるものではない。これは両者が「精神において」あるいは「意識」のレベルで一致するということではない。結合がなされるためには、身体とは別の何かが必要である。結合は触れ得ないもの (intouchable)においてなされる。（中略）触れ得ないもの、それは事実上到達することができ

ない触れ得るものではない——無意識は事実上到達不可能な表象ではない。(中略) 触れられることと触れることを裏と表として理解しなければならない——触れることに住み込む否定性 (中略)、触覚における触れ得ないもの、視覚における見えないもの、意識の無意識 (意識の盲点、意識を意識たらしめる盲目性、すなわちあらゆる事物の間接的で転倒した把握)、それは感覚的「存在」の別の側面または裏面 (あるいは別の次元性) である。(中略) 身体図式が図式たりうるのは、それが自己の自己への接触(というよりはむしろ非差異) であるからである (VI, 307-309)。

周知の通り、ここで述べられている経験はフッサールから借用されたものであり、その表面的な意味はごく単純なことである。私の右手が左手に触れるとき、私は左手を物理的な事物として感覚する。だがその瞬間「驚くべき出来事」(S, 210) が生起する。私の左手も私の右手を感覚し始める。「私の右手は、私の左手における能動的接触の到来 (avènement) に立ち会う」(S, 212)。ある探索能力が事物としての左手にやってきて身を置き、あるいはそこに住み込む。こうして私は触れつつある私に触れる。私の身体は「一種の反省」を遂行する。それは反省一般のモデルなのである。

ところがこの自己の自己への接触は、事実上はけっして実現せず、その間に「触れ得ないもの」がつねに介在する。上の引用でわかるように、身体の反転可能性は、反省のモデルのみならず、「意識の無意識」のモデルをも提供しているのである。このことに関して二点だけ指摘しておこう[5]。

(1) 触れるものに触れるというナルシス的な関係において、身体とは「別の何か」が垣間見られる。それが「触れ得ないもの」と呼ばれている。ただし、触れ得ないものとは、何かが事実上は触れ得ないものであ

るということだけではない。あたかも「無意識が事実上到達不可能な表象ではない」のと同じように、原理的にそれは隠されてしまっている。

他方、この自己との関係は、精神という上の水準で一致するわけでもない。一致はいわば身体と同じ水準において経験され、両者を俯瞰するような「観察者」(VI, 317)やカント的な主体は必要がない。「触れ得ないもの」とは、身体とは「別の何か」であるが、身体以外のものでもないような何かとして到来する。

したがって、能動と受動の回転軸と言っても、すでにある二項のシンメトリックな反転を思い浮かべるべきではない。正確に言えば、能動的な「身振り」[6] が、まさにその世界探索において受動的なものに遭遇すること、そしてまさにその時にたんなる物であったはずの左手に世界を探索する能力が住み込むこと、この二つの運動が同時に生起している、ということである。能動が受動になり、受動が能動になる、という相互的な「メタモルフォーズ」(VI, 194) が行われるような、「別の次元性」の生起が問題なわけである。

こうして身体的運動は、まさにナルシス的な円環が成立しようとする瞬間に、身体とは別の何か (「触れ得ないもの」) の到来に立ち会う。それは反省的な運動を可能にすると同時に、その完結を禁じるような何かなのである。この反省の可能性と不可能性の根拠をメルロ＝ポンティは「意識を意識たらしめる盲目性」と呼ぶ。

(2) 触れ得ないもの、見えないもの、そして無意識は、反省的意識にとっては「間接的」にしか把握し得ない「距離を持った」ものであるが、それはたんなる欠如ではなく、感覚的「存在」の別の側面または裏面 (または別の次元性) である、とメルロ＝ポンティは述べる。言い換えるならば、反省の盲目性は、まさにその欠如において、「距離を持った存在」を「存在するにまかせる」(前出) のである[7]。

このことは「否定的なもの」一般や弁証法についての徹底的な再考を

促すのだが、ここでは「否定的なもの」が、無意識の「回転軸」における存在の「二重化」として捉え直されていることを指摘するにとどめよう。

> 否定的なもの、無、それは二重化したもの、身体の二つの紙葉(feuillet)、相互に連結された内部と外部である——無、それはむしろ同一なものの差異である。/反転可能性＝裏返される手袋の指。(・・・)回転軸だけが与えられている——手袋の指の先が無である(VI, 317)。

感覚的存在としての身体は、一方では能動と受動の分節化されたシステムを形作る。しかしその再帰的な円環が閉じられようとする瞬間に「触れ得ないもの」が生起する。感覚に書き込まれたこの否定性において、能動と受動は距離をはらみつつ内的に接合する。そこにおいて感覚的存在は内的に二重化するのである。

こうしてメルロ＝ポンティは、サルトルが「無」と呼び、ラカンが「欠如」と呼ぶものを、感覚的存在の二重化の場として捉え返す。真に否定的なものとは無限定な欠如ではない。ある特異な場(「手袋の指の先」)において、感覚的な存在が構造的に二重化し、相互にメタモルフォーズすることなのである。この構造的な二重化を、同一性と差異の対立で語ることはできない。存在と非在、同と他が相互にメタモルフォーズするある「厚み」[8]を持った存在に開かれること、それが「初源のウィ」としての無意識なのである。

3．リビドー的身体とそのシンボリズム

最後に検討すべきは、このような身体が、精神分析のテーマとどうか

かわっているかということである。彼はそれを「リビドー的身体」の問題と呼ぶ。リビドーといっても、彼はこの概念のエネルギー論的な側面はあまり強調せず、脱中心化、骨組み（membrure)などトポロジー的・建築学的比喩を中心に議論を組み立てていく。

残念ながらこの点に関するメルロ＝ポンティの記述はひじょうに断片的であり、その体系的な展開を再現するのは難しい。晩年の講義の準備ノートなど[9]を参考に、以下の三点のみを指摘するにとどめたい。

（1）体内化と投影の分節化

まずこれはメラニー・クラインを援用しながら説明されていることであるが、メルロ＝ポンティは身体を、他者の「体内化（incorporation）」と「投影 (projection)」の循環の場として捉え、内部と外部の関係のイマジネールな性格を強調する。能動と受動は鏡像的な関係であり、外部への移行は同時に他者の体内化でもある（NA, 345-346)。リビドー的身体は、自他のトポロジックな反転可能性の場なのである。

こうした論理によってメルロ＝ポンティは、サルトルのまなざし論、対他と対自の相剋論を乗り越えようとする。まなざしによる客体化というサルトルの分析には深い真理があるが、それはもっと一般的な関係の特例にすぎない（NA, 348)。対他と対自の対立以前に、見る身体そのものが、つねに鏡像的な他者のまなざしの可能性を刻み込んでいる。見ることは、同時に見られることの可能性なのである。

メルロ＝ポンティによれば、これは「イマジネール」概念の定義にかかわる。サルトルのイマジネールは、不在への現前、不在の現前であるが、メルロ＝ポンティにとっては「切迫するものの現前、潜在するもの、隠されたものの現前」(VI, 298)である。右手と左手の反転可能性と同様、切迫する他者の潜在性は、けっして事実上実現されることはない（事実上実現されたとしたら、他者経験はないであろう)。にもかかわらず他

者のまなざしは「ここ」にある身体に書き込まれている。それは一種の「距離を持った現前」であり、欲望に満ちた「テレパシー」的な体験を可能にする（VI, 299）。自他の「反転可能性」とは、今ここに切迫する他者を、その遠さと距離において「存在するにまかせる」ための根拠なのである。反転可能性とは、自他の経験的な非対称性と超越論的な対称性の共通の根拠だと言ってもよい。

このようにしてメルロ＝ポンティは、対他と対自の関係という問題をずらそうとする。真の問題は、私の身体の自己性が他者によってどのように疎外されるか、ということではなく、私の身体そのものに書き込まれたイマジネールな他者（潜在的で夢幻的なものとして切迫する他者）が――象徴的なものの媒介をまたずに――、どのように実際の他者たち（非対称的な他者）となるのか、ということである[10]。実際の他者が他者である限り、それは身体によるイマジネールな先取りをいわば裏切り、そこに死に向けた闘争が生じうる。しかしメルロ＝ポンティが示そうとしていることは、身体の自己と自己の関係において、こうした否定と闘争の可能性がすでに書き込まれているということである。

他者の到来によって生じるのは、たんに私の身体が客体化されることではなく、自他の回転軸において、内側から脱中心化が生じ、自他の境界が「二重化」することである。身体によって「他者は私の領野に滑り込み、それを内側から多数化する」(PM, 192)。言い換えるならば、経験的な他者のまなざしの経験を可能にするのは、この「私を脱中心化し、私の中心化に他者の中心化を対立させる能力」(VI, 114)である。反転可能性とは、固有な身体の自己性がすでに潜在的で夢幻的な他者によって分割され、内的に多数化していることを示しているのだ。

この自己と自己との関係、その自己多数化、それは経験的な他者の暴力よりも根源的である。「攻撃性は他人への関係である以前に、自己自身への関係である」(NC, 150)。リビドー的な身体とは、この自己の自己

に対する関係の場であり、この関係が同時に、自己と他者の根源的な関係を創設するのである。

（2）不可能なものの結晶化としての感覚器官

むろんまなざしだけが他者との関係を織りなしているのではない。身体の各部分、身体の開口部ひとつひとつが、内部と外部の回転軸となる。その各部分において、イマジネールが陥入しているのである（NA, 346)。

このことは性的な器官を含めた、感覚器官の問題と関係する。メルロ＝ポンティは、感覚器官の発生を合目的論と機械論の対立の彼方で思考しようとする。感覚器官は、純粋に内在的な生命の合目的論やリビドーによって発生するのでもなく、たんに環境との機械論的な関係から作られるのでもない。内的な力でもなく外的な作用でもない何かが働く場において、目という内部と外部の（二重の）境界が到来する。

「目が見るのではない。しかし魂が見るのでもない。（中略）何かが視覚器官に集められ、そこに場を穿つ。ひとはこの場から見るのだ」(NA, 284)。目は見ない。なぜなら、身体の凹みがはらむイマジネールな他者は、いまだ顕在化していないからだ。しかしそれを魂という精神の目が見るわけでもない。「見ること」は、目とも魂とも一致しない。視覚とは「遠隔知覚」であり、「不可能なものの結晶化」なのである（VI, 327)。すなわち感覚器官は、自他の回転軸（接合とずれの二重の境界）において、イマジネールな身体を結晶化するものとして到来し、切迫する他者の知覚を可能にする（NA 350)。

ところでメルロ＝ポンティについてしばしば、彼は「固有な身体」の統一性を前提としている、と批判され、それに対してラカン的な「寸断された身体」が対置されたことがあった。しかしラカンが「寸断された身体」と鏡像的自我の統一を対立させていたように、メルロ＝ポンティ

が器官や感覚の多数性と身体的統一を対立させていたと考えてはならないだろう[11]。メルロ＝ポンティの語るリビドー的身体の統一性は、能動と受動の反転の場においてそのつど垣間見られるものであり、つねに到来しつつあるものとしてしか、発生しつつあるものとしてしか現れない(cf. NA, 194)。それは多数性が思考可能になるような領野の開けそのもののことであり、それ自体は一でも多でもない前個体的なものなのである[12]。

(3) 根源的シンボリズムとしての身体と意味の重層性

あるところでメルロ＝ポンティは、「フロイトの功績のなかでもっとも興味深いもの(中略)それは第二の『我思う』という考え方ではなく、根源的で原初的なシンボリズムという考え方である」(RC, 70)と述べる。感覚の不可分性、そしてそこに生じる分節化という主題は、意味一般やシンボリズムの発生という問題を提起する[13]。こうして私たちは最初の引用に戻ってきた。感覚すること、そして分節化することとしての無意識は、どのような意味で「自然的シンボリズム」なのだろうか。

分節化とは、差異が差異として現れることである。しかしすでに示唆しておいたように、この差異は、水平的な相互排除のシステムの差異ではなく、より深い「潜在性」の次元に垂直的なレフェランスを持っている。この潜在的次元において、異質な二つの要素(受動と能動、自己と他者)が互いに他と関係し、相互にメタモルフォーズしながら内的に接合すること、これが自然的なシンボリズムなのである。

こうしたシンボリズムを支えているのが、分節化という二重の回転軸である。それは概念的本質でも個体的事実でもない媒介的な場に場を持つ。この回転軸において、ある構造的な布置は、みずからを脱中心化して潜在性を呼び起こすと同時に、再中心化して新たな意味を制度化する(cf. PM, 63 n.)。分節化とは、象徴的制度の(けっして完結しない)自

己反省性の場であり、それはみずからの働きをみずから隠蔽しながら新たな意味を沈殿させる。マルク・リシールの言葉を借りるなら、ある象徴的制度はつねにそれ自身と一致せず、意味はつねに生成するものとしてしか現れないのだ[14]。

身体は、こうした内部と外部、自己と他者の分節化に基づく「根源的制度化」(PM, 63 n.) の担い手である。ある身体的な行為は、それが根源的なものであればあるほど、さまざまな象徴体系に同時に関係し、それらによって多元決定される。根源的な行為は、それ自身がそこにおいて多元化するような生成の場に、内的に連結しているのだ。したがって、その行為の解釈としての精神分析は、意味の重層性を見いださざるをえなくなる。

> フロイト主義において本質的なことは（・・・）ある行為の分析は、ある見かけに意味の複数の層を見いだすということ、それらはすべて固有の真理を持ち、複数の可能な解釈は混在した生の言説的な表現であるということだ (RC, 71)

こうした意味の重層性はすべて、「混在した生」への「初源のウィ」によって可能になる。たとえばある患者の言葉に私たちが見いだす存在者の意味は、すべて、ひとつの存在のエンブレムである(VI, 323)。存在は、つねにこうした意味の重層性として、多元的な現れをみずから要求するのである。

しかし、この多元性がたんなる経験的多義性に尽きるものでないように、存在の統一性は、ある実体の抽象的な同一性ではない。身体の能動と受動が「触れ得ないもの」の束の間の到来によって統一されているのと同じように、さまざまな存在者は、ある潜在的な「奥行き」と厚みを持った時間性において一時的に共存する。この共存は、いかなる階層性

も持たない構造的な共存のことであり、それは存在者の多数性を排除しないばかりか、それらの相互分節化によって建築学的に支えられている[15]。そこにおいて意味の生成は完結せず、内的な競合とあらたな共存の創設へと開かれているのである。

おわりに

かつてはメルロ＝ポンティの存在論は、現前と不在の彼方でそれを統一する「存在」を前提する現前の形而上学の一種としていわゆる脱構築の対象とされたこともあった。しかし、メルロ＝ポンティの哲学を生産的に継承するためには、むしろ意味の重層性と生の統一性の緊張関係に生起する分節化の思想、すなわち到来する差異とその意味の沈殿の思想（それを彼は「制度化」と呼んでいた）を救い出す必要があるだろう。そしてこの「分節化」の問題は、ロゴスそのものの可能性にかかわっている。哲学の言語とは、この沈黙の出来事をある種の語り（パロール）において継続し、「存在の証人」（VI, 167）となることだからだ。上で引用した、「文字以前の分節化」についての文章に続いて、メルロ＝ポンティは次のように言う。

> 哲学は作動する言語であり、内側から実践によってしか知られえず、沈黙の言語によって呼ばれて物にたいして開かれ、あらゆる存在の「存在」である分節化の試みを継続するのである（VI, 168）。

「分節化」そのものは、言語以前的であるとともにすでに言語の内にある。哲学という実践的な言語活動は、沈黙の言語に呼びかけられ、「文字以前の分節化」の「試み」である「存在」を継続し、それをパロールの実践によって表現にもたらすことである。現前と不在の対立以前、文

字以前の分節化の試みを、ある種の言語的実践によって継続すること、このことこそが沈黙の世界にたいして開かれていることである。言い換えるならば、哲学が開かれている沈黙の世界は、沈黙しているという形で表現にもたらされ、表現にもたらされる限りで沈黙する。無意識は哲学の言語の可能性そのものだ。メルロ＝ポンティの哲学は――そして同じ潜在性をめざす精神分析は――無意識の分節化を媒介に沈黙の世界を表現に導くのである。

付記　本稿は日仏哲学会2001年春のシンポジウムにおける口頭発表原稿を加筆訂正したものである。執筆にあたっては文部省科学研究費補助金奨励研究(A)(課題番号 13710016) の援助を受けた。なお、多く引用されるメルロ＝ポンティの著作については以下の略号を使用し、ページ数を記す。

NA : *La Nature,* (notes, Cours du Collège de France), établi et annoté par D. Séglard, Paris, Seuil, 1995.

NC : *Notes de cours 1959-1961*, Paris, Gallimard, 1996.

PD : *Parcours deux 1951-1961*, Lagrasse, Verdier, 2000.

PM : *La prose du monde,* Paris, Gallimard, 1969.

RC : *Résumés de cours* (Collège de France 1952-1960), Paris, Tel/Gallimard, 1968.

S : *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.

VI : *Le visible et l'invisible*, Paris, Tel/Gallimard, 1964.

1）本稿ではラカンとメルロ＝ポンティの関係を系統的に解明することはできない。メルロ＝ポンティとラカンの関係に関する最近の現象学的論考としては以下のものがある。Marc Richir, «Merleau-Ponty : un tout nouveau rapport à la psychanalyse», *Actualités de Merleau-Ponty, Les Cahiers de Philosophie,* n° 7, 1989, pp. 155-188; Rudolf Bernet, «Voir et être vu. Le phénomène invisible du regard et la peinture», *Revue d'esthétique*, n° 36, 1999, pp. 37-47; R. Bernet, « The phenomenon of the gaze in Merleau-Ponty and Lacan», *Chiasmi international*, 1, Vrin/Mimesis/Memphis, 1999, pp.105-120.

2）「ゲシュタルト」と題された草稿でメルロ＝ポンティは、「それは示差的で対立的で相対的なシステム」であり、このシステムの回転軸は「<何か(Etwas)>、物、世界であって、観念ではない」と言う（VI, 259)。

3）ある草稿においてメルロ＝ポンティは、哲学は「我々の能動性の受動性」について語ったことがなかったと述べ、それは「我々の生の軸や蝶番」であり、「魂は思考しないでいることができない。なぜなら、何か(quelque chose)と何かの不在がつねに書き込まれるような領野が開かれたからだ」と述べる(VI, 274)。「書き込み」の比喩はベルグソンに由来するようである。(Cf. NA, 88)

4）上記の1960年の学会においてメルロ＝ポンティは、「無意識は意識の背面である」ということは、シンメトリーとして理解されるべきではなく、カントの「負量の概念」になぞらえられるようなものであり、「現前と不在の分節化」ないしはそれらの「同時性」に関係するという。(PD, 275)

5）身体の反転可能性の問題が後期思想において持つ意味については、伊藤泰雄「『隔たり』と『可逆性』」日本メルロ＝ポンティ・サークル『メルロ＝ポンティ研究』第五号、1999年、pp. 50-67参照。また同様の問題を「構造論的存在論」として取り上げ直す試みとしては、大滝結「間と構造」*ibid.*, pp. 68-80を参照。こうした問題が「自然」の問題全体において持つ意味については、加國尚志『自然の現象学――メルロ＝ポンティと自然の哲学』晃洋書房、2002年（とりわけフッサールとの関係についてはp.163以下）を参照されたい。

6）「肉とは、私の身体が受動的ー能動的（見えるー見る者）、即自的量塊[である]と [同時に] 身振りであることだ」(VI, 324)。ラカンは『眼と精神』を注釈しながら、「身振り」とは「中断して宙づりになるべくしてなされる」ものであり、「見るべきものとして与えられた運動」であるという。メルロ＝ポンティはこの「中断」において垂直に立ち現れるものを追求したのだとも言えるかもしれない。Cf. Jacques Lacan, *Le Séminaire*, livre IV, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, coll.«points», 1973, p. 130-132.

7）この問題は、メルロ＝ポンティにおいて「否定性」と「超越」の問題が結

びついていることに関係するだろう。あるところで彼は「超越」を「原理上距離を持った存在」、「それにたいしては距離とは結合であるが、それとの一致はありえないような」存在と規定している（RC, 79)。

8）「同と他の問題に私は何をもたらすか。同は他の他であること、同一性は差異の差異であること。このことは1）止揚を実現しない。それはヘーゲル的弁証法である。2）それはその場において実現する。蚕食によって、厚みによって、空間性によって」(VI, 318)

9）以下ではNA, 343-362の議論の組み立てを参考に、他にその講義要録 (RC, 177-180)、およびVIの関連草稿を主に参照している。また、NC, 149-156にも精神分析の哲学的意味についての短いノート下が採録されている。

10）言い換えるならば、問題は、固有化と疎外の関係ではなく、また外界に不適合な自我を適合させることでもなく、「夢幻的・ナルシシックな他者を、存在する他者（現実原則）に結びつけること」なのである。(NC, 153).

11）Cf. Jacques Lacan, «Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je», *Ecrits,* Paris, Seuil, 1966, p. 97.

12）「キアスムは、あらかじめ統合されながら差異化しつつある諸総体を裏と表のように結びつける。したがって世界は、客観的な意味では1でも2でもない――それは前個体的なもの、一般性である」（VI, 315)

13）メルロ＝ポンティは、レヴィ＝ストロースの「浮遊するシニフィアン」という概念にこうした意味の地平の（言語的分節以前の）分節化の機能を見ている。浮遊するシニフィアンとは、概念的な意味は「何も分節しないが、可能な意味の領野を開く」ものであり、それが社会において個人自身と「他者たちとの制度的な均衡関係」との「隔たり」の経験としての社会的「交換」を成立させる点にシンボリズムの本質があるという（S, 146)。

14）リシールによれば「ラングという象徴的制度」は「おのれ自身と動的な不一致」にあるにもかかわらず、構造主義はシニフィアンを物化してしまい、「時間化・空間化」としての「言語の現象」をとらえ損なっているという。Marc Richir, «Merleau-Ponty : un tout nouveau rapport à la psychanalyse», p. 180,186.

15) メルロ＝ポンティによれば、新たな存在論による世界のモデルは、ルネッサンスの遠近法的な絵画ではなく、むしろバロック的なものである。「事物はまなざしをその稜線で削り、おのおのが絶対的な現前を要求し、他の事物の現前と共不可能である。しかしながら、そのすべては布置の意味のおかげで共に共存しているのだ。（・・・）このバロックな世界は精神の自然にたいする妥協ではない。」(S, 228)

La psychanalyse dans la dernière philosophie de Merleau-Ponty

Koji Hirose

Pour bien saisir l'importance accordée à la psychanalyse dans la dernière pensée de Merleau-Ponty, il convient d'examiner les définitions apparement contradictoires qu'il donne à l'inconsient. L'inconscient se définit d'abord comme indivision du sentir, mais il se définit aussi comme une articulation quasi linguistique. Ce double statut exprime notre contact à distance avec l'être sensible, contact qui est assuré par la réversibilité du corps où l'inconscient joue un rôle de «pivot». Nous avons enfin essayé de comprendre comment cette question conduit à ressaisir le symbolisme primordial du corps.

REVUE DE PHILOSOPHIE FRANÇAISE

N° 7 2002

Colloque « Psychanalyse et philosophie »

1 Takako TANIGAWA, *Introduction*

2 Satoshi KATO, *Psychanalyse de " la pensée inclusive de la folie"*

20 Ken' ichiro OMIYA, *Incident and Transit -Heidegger's Ding/Lacan's Ding-*

40 Koji HIROSE, *La psychanalyse dans la dernière philosophie de Merleau-Ponty*

Colloque « Les possibilités de la philosophie de Maine de Biran »

59 Sumio MATSUNAGA, *Introduction*

60 Kô MURASE, *Hétérogénéité de la résistance chez Maine de Biran*

75 Fumiaki IWATA, *La réflexion et les signes volontaires -généalogie du spiritualisme français-*

89 Yukio NAKA, *La constitution du corps propre -chez Biran? ou au-delà de Biran?-*

Etudes

104 Katsuhiko KOEMON, *Le mouvement du corps comme signe*

121 Etsuhiro HASEGAWA, *La divergence de vues entre Comte et Mill concernant le déterminisme biologique*

138 Hiroyuki NAKANE, *La frontière entre l' esprit et le corps*

Comptes Rendus

155 Tetsuya SHIOKAWA, *Lire " les Pensées" de Pascal (Katsuzo MURAKAMI)*

161 Humiaki IWATA, *Philosophie de la religion du spiritualisme français (Yukio NAKA)*

167 Hisatsugu MURAI, *Comte et Marx (Shin ABIKO)*

172 Toshio ISHII, *La théorie de la mémoire dans Bergson (Naoki SUGIYAMA)*

178 Harumi ISHIZAKI, *Nao SAWADA(ed), L' héritage de Jean-Paul Sartre (Mitsuo NAKATA)*

187 Tatsuru UCHIDA, *Lévinas et la phénoménologie de l' amour (Sumihiko KUMANO)*

193 Shigeyoshi NIWATA, *La phénoménologie et l' invisible -pour la philosophie de la vie de Michel Henry- (Taro MOCHIZUKI)*

199 Kuniichi UNO, *Deleuze -la philosophie du fluide- (Osamu ZAITSU)*

Editorial

Société franco-japonaise de Philosophie

ISSN 1343-1773

フランス哲学・思想研究 第7号 日仏哲学会